

こけしの誕生



平成三十年
八月二十六日

橋本正明

こけしの誕生

二つの説

- 東北残存説

こけしのような木人形は日本全国に存在したが、たまたま東北でそれが今日まで残った。

- 東北固有説

こけしは東北で誕生した東北固有の人形である。

従来文献〈こけし風土記〉～〈こけし辞典〉は殆ど東北固有説を支持していた。



実は両方正しい

こけし

きでこ・きぼこ・こけし



文政から天保

木偶 ほうこ 芥子人形

ほうこの世界

日本全国

全日本こけしコンクールの審査員長・山田徳兵衛氏(日本人形協会会長)のお話によれば、宮中ではご懐妊のお慶びがまだ犬という。江戸の犬張子とは異なる。風「うないの友」二編に図示あり」
 △ 人形の祖型を副葬品の類にみる原
 のことはさておき、倭名類聚抄・卷十
 とがた」と發書
 ているところを
 は平安中期以前
 かる。
 おいてすら日常
 ては墨書してい
 頁紙のみならず
 か想像する以上
 ない。その紙が
 に形代として用
 られる紙人形(こ
 はいつの頃か、
 か、撫物(なで

袖を、い
 え、これ
 の一部に
 証左であ
 も知れぬ
 わさるべ
 あった。
 (註)
 寫(註)は
 向)に安
 疊紙・眉

(鹿島流
 サンなど)
 でもあ
 折口信
 言ふのは
 巨大な
 の類だっ
 にも、大
 して其外
 のだが、
 った。其
 言ひきつ
 事に見え
 疫病流行
 振きて、
 には、草
 ……此は
 人間の形
 変って居
 で、道教の
 文字の宛
 まさに
 らば身に
 みそぎ河
 げとたれ
 き流さる
 み)その

久松保夫の関心 〈木の花〉の「ほうこ考」 古典、文献、収集資料からほうこに 関わる記述を網羅的に蒐集

此には「かかる
 の花を折らせ給
 (作らせ給ひて、
 きつけて、あて
 香木で作った
 るなど、優雅な
 れるが、一方、人
 人形も多くあつ
 まえての故実書
 (年刊)巻五に一
 (神祇官、預前
 (金銀粧各十六枚
)とあつて、平
 の八ひとがたV
 形であつたことが
 ほぼその寸法は一
 (木人像(長八
 日記、天禄三年
 がら等身代のひ
 末期の兵器贈平
 (倭人形一枚、
 ある。
 宮跡から発掘さ
 れは、五寸ばかり
 多くが溝の中か
 られらがやはり埋

木偶 ほうこ 芥子人形
 ほうこの世界 日本全国



ララミー牧場

ロバート・フラー吹替え

1960年6月23日～1963年7月18日

日真名氏とびだす

ラジオ東京テレビ

1955年4月9日から1962年7月14日





久松保夫（木偶坊）は工人の方にも勉強の場であった。
山形小林清次郎さんの訪問



久松保夫：芸団協専務理事
 (日本芸能実演家団体協議会)
 昭和57年6月逝去
 グラフィック社「こけしの世界」

芸団協：昭和42年社団法人認可
 初代会長：徳川夢声
 二代会長：坂東三津五郎
 三代会長：中村歌右衛門



ほうこは採り物であって、日本の芸能と深く関わっている

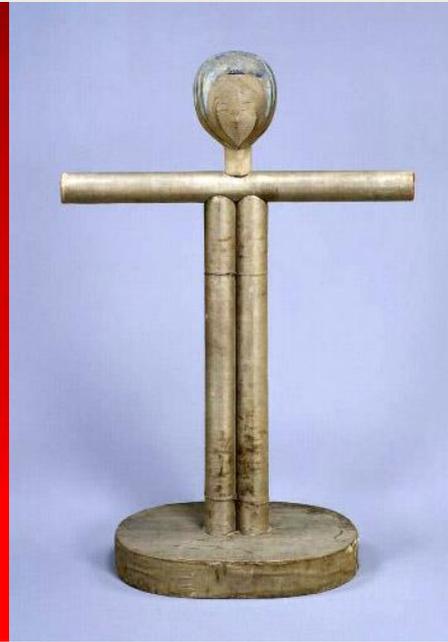


這子

天兒



這子



天兒

(東京国立博物館)

這子（ほうこ）とは、幼児が這う姿に作ったお人形のこと。天兒（あまがつ）と同様に、平安時代を起源とし、幼児の穢れや厄を祓う人形として用いられた。



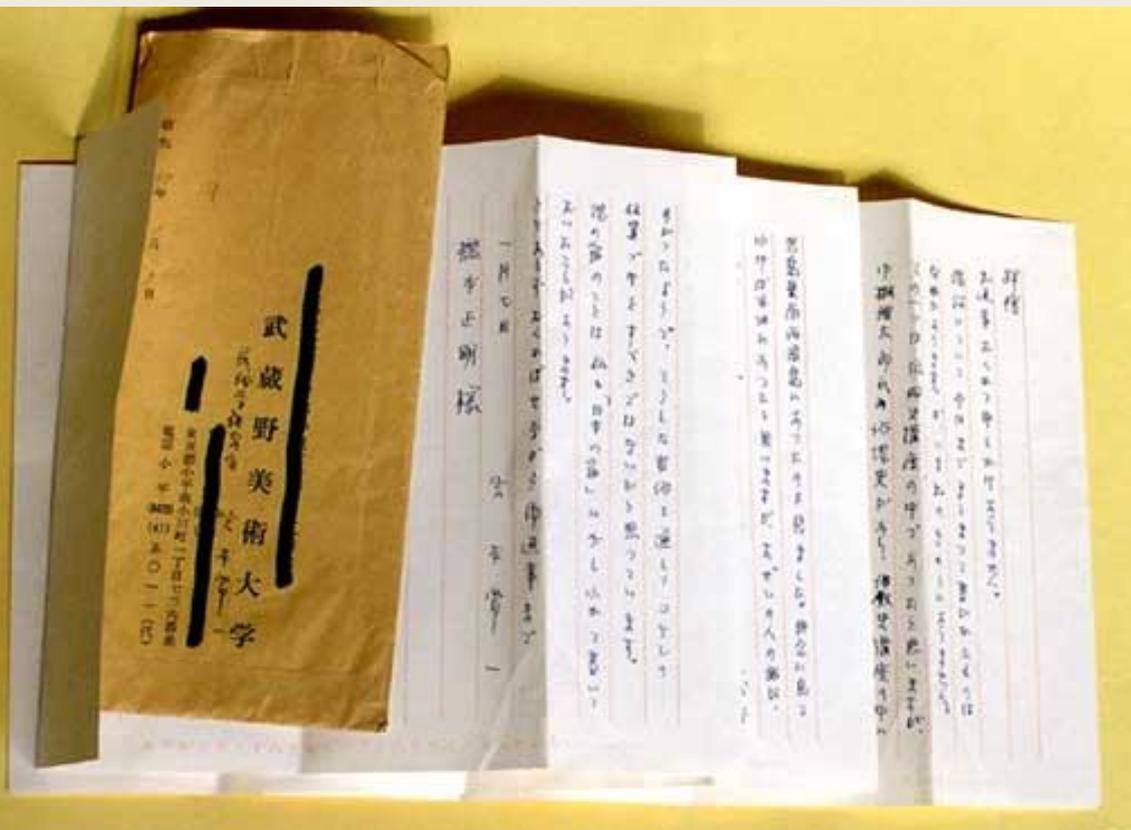
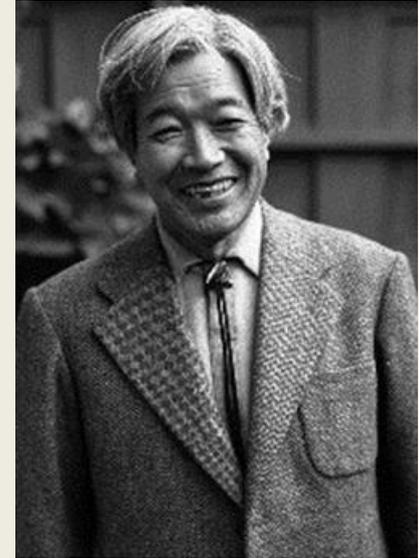
高松 奉公さん

倉吉 はこた人形



ほうこ → は～こさん

民俗学者
宮本常一からの手紙
(昭和四八年一月七日付)



コケシということばそのものは木屑のことであり、キボコの方が一般的だったようです。そしてそれは東北だけのものではなかったようです。私の郷里山口県大島などにも幼少のころにはありましたし、またろくろは使わなかったけれど、形からいって同形のものが、鹿児島県南西諸島にあったのを見ました。丹念に見てゆけば各地にあったと思います。



樺太ウイльта
19世紀



アイヌ

東京国立博物館



トカラ人形(昭和十年) 天理ギャラリー

トカラ列島中之島十島村内の神社のご造替で余った用材で作られるもの

樺太・北海道のアイヌ 奄美

橘文策も宮本常一から情報を得ていた



周防大島

「民俗学をやっている宮本常一からの通知では、最近同氏がこけしを持って帰ったら、令姉は一眼見るなりおおかはいいホークさんだと叫ばれたそうである。意外にも親しみのありそうな口ぶりに興味をそそられて聞いてみると、山口県大島に育ったころ(二十余年前)村に森口といふ樽屋の爺さんがゐて、こんな木人形を作つてゐたそうである。爺さんはもと四国から渡ってきた木地屋で、人形は棒状の作りつけで顔を描き、ホークさんと呼んで子供達が弄んだそうである。」

橘文策 <こけしと作者>

奥井紀舟（としふね）氏からの情報①

NPO法人周防大島郷土大学役員

（宮本常一が郷土のために開いた学舎、郷土大学）

キボオコについて

今から50年以上前のことですが、宮本常一氏と祖父が話しをしていた中に、ボオコについての会話があったのを覚えております。曾祖母に『ボオコて何？食べるもの？』と尋ねたら『女の子のもんよ、キボコとゆうんで、ひな祭りの服のない木の人形さん』と曾祖母は言いました。曾祖母の隠居部屋に何体かがあったのを覚えております。また、祖父の妹の家にもありました。

祖父との会話で記憶しているのが、炭焼きのことで、『この度で最後です。ありがとうございます。』と御礼としてキボオコ作り、持ってきました。実物を見ました。何体かありました。三体は曾祖母の隠居部屋にありましたが、一緒に火葬したと思います。周防大島にまだ木地師がいて、キボオコを作ったのは、事実です。

周防大島

| | |
|-----|------|
| 白木山 | 374m |
| 佐連山 | 339m |
| 大見山 | 336m |
| 嵩山 | 618m |
| 頂海山 | 455m |

宮本常一誕生地
家室西方村

奥井さんの居る
地家室

2歳児理稀くんが
行方不明になった
家房

奥井紀舟（としふね）氏からの情報②

NPO法人周防大島郷土大学役員

木地屋とサンカについて

キジヤのほかはハチミツミツカケ（サンカ、サンガ）も山の家で寝泊まりしていたことをはっきり記憶しています。

集落と少し離れた位置にある家で寝泊まりしていました。すると我が家では、『今、サンカのミツカケがきとる、木地屋がきとる』と言いました。何故、自分ところの家に知らん人が寝泊まりしているのか、子ども心で不思議に思っていました。

私の家に来て炭焼きをしていたのは、確かにキジヤ（親父の従兄弟に確認しました）です。炭焼きをやめて余所に行くので御礼にキボオコを作って竹の籠に入れて持ってきたことは、間違いないです。

轆轤で回して作ったキボオコと思うのです。

奥井紀舟（としふね）氏からの情報③

NPO法人周防大島郷土大学役員

ロクロについて

祖父に、『ろくろって何？』と質問したところ、『石臼みたいのをまわす』という答えでした。

キジヤとサンカが仕事するときは山の家に泊まっていました。

キジヤやサンカは、集落の人達に素顔は見せませんでした。常に頬被りをしていました。

山の家に布団、食器類が置いてあり、轆轤もありました。祖父と山の家に上がった時『あれが轆轤じゃ』と教えてくれました。

54年くらい前、キジヤが、ケヤキの盆を作ったらしく、それをキジヤの盆と言っていました。漆を塗るときかぶれるから触るなよと言っていました。盆や竹のこおりを山の家の外に並べていたことを覚えております。

奥井紀舟（としふね）氏からの情報④

NPO法人周防大島郷土大学役員

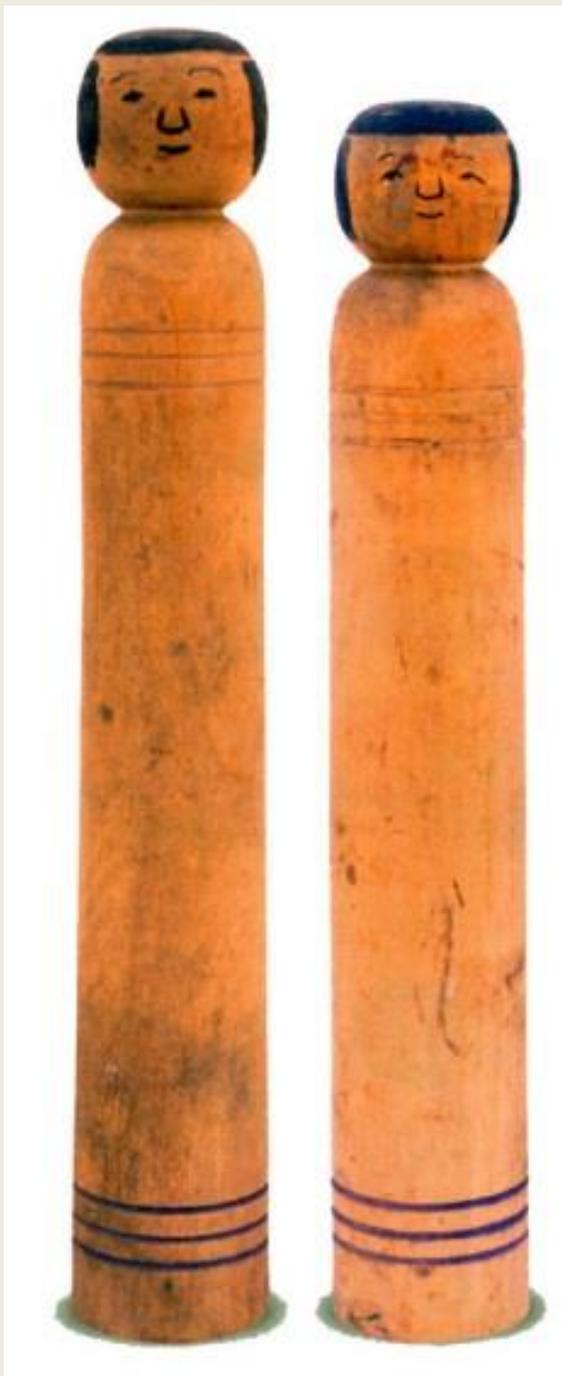
ほ～こさんについて

宮本常一先生の本を読む会の会長さん（宮本常一氏の生家の近く）の奥様から指摘がありました。正しい呼び名は『ほ～こさんです。ボ～コ、キボオコは記憶違いですよ。』と。

はっきりしているのは、ほ～こさん人形を作っていた木地師樽屋（木地師）が存在していたということです。

ほ～こさんの顔全体を記憶していれば良いのに、45年以上前です、ただ私の印象では、華やかな人形ではなかったです。眼はあけていない。ちょっと長いU鼻、小さな点のような唇、おかっぱのおさげ、耳はなかったか、胴体部分には、笹の葉のような絵か、輪がありました。
ほ～こさんを座布団にくるんで、おんぶして、遊び唄を歌っていたというおばあさんがいました。

奥井紀舟（としふね）（s31. 7. 10生）
山口県大島郡周防大島町地家室



眼はあけていない。ちょっと長いU鼻、小さな点のような唇、おかっぱのおさげ、耳はなかったか、胴体部分には、笹の葉のような絵か、輪がありました。

長身ではありませんでした。握りこぶし二つ分くらいの大きさ、(ラムネの瓶のビー玉が止まるところが頭くらい)頭は黒い。

大鯨 間宮明太郎の木おぼこ
のイメージを髻髷とさせる
左のこけしを短くしたようなイメージか？

朱魚坊 間宮明太郎木おぼこ



京都の木人形 江戸期 (箕輪新一蔵)

ほうこから

こけしへ進化

• 三つの背景



こけし

きでこ・きぼこ・こけし

文政から天保



木偶 ほうこ 芥子人形

ほうこの世界

日本全国

ほうこからこけしへ

進化の背景

① 農民における湯治習俗の発展・定着

『東北各地の温泉場が一般庶民階級によって保養や治療のために利用されるようになったのは、徳川時代もずっと下って文化・文政ごろからである。現在のようにレジャーを楽しむ温泉一泊旅行というようなものではなく、疲れを癒し、病気をなおし、また一生懸命に働く力を貯える事を目的としたものであった。だから温泉場といわず湯治場といい、温泉に行く事を湯治に行くといった。』

菅野新一〈こけし事典〉

それ以前は武家や富裕な商家が病気の療養を主たる目的として行っていた。（例：作並岩松旅館）

① 農民における湯治習俗の発展・定着

『病人らしい湯治客はあまり見当たらない。彼等の多くは、自分の手に依って作られた米味噌を、野菜を、中には寝具を自らの体力に応じて背負い込んで来るのである。なかには数十料離れた部落から、山越えして来る者も珍らしくはない。彼等の大半は澆刺たる体軀の所有者である。彼等にとっては、湯治は一種の宗教である。（中略）この事實は、聖地に参ずる、殉教者の信仰に燃ゆる気持にも、一脈相通ずるものがあると観ることは無理であろうか。』

石坂洋次郎〈東北温泉風土記〉

病気の療養ではなく、再生儀礼的な習俗に近い。

ほうこからこけしへ 進化の背景

② 山の木地師が湯治場に定着

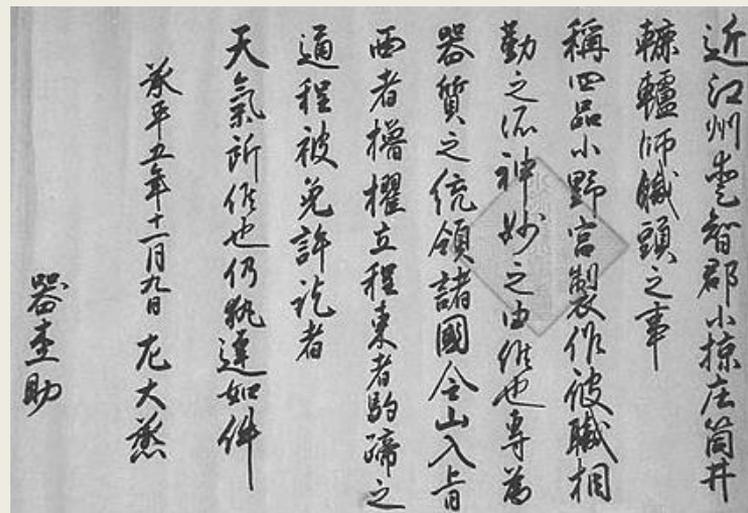
あるいは湯治場における木地師の出現
(原料立地から消費地立地)

本来は原料利用効率から原料立地

それを保証していたもの (木地屋文書)

- 朱雀天皇綸旨 (りんじ)
- 正親町 (おうぎまち) 天皇綸旨
- 信長免許状
- 秀吉免許状

「全国何処の山でも八合目以上の
の木は伐採自由」



朱雀天皇綸旨

ほうこからこけしへ

進化の背景

② 山の木地師が湯治場に定着

あるいは湯治場における木地師の出現
(原料立地から消費地立地)

江戸末期以降

木地師に与えられていた特権の保障が失われる
論山事件(山論)が各地で起こる

木地師は原料産地より消費地近くに移動する

- 横川・熊沢から遠刈田へ
- 荒湯・鬼首・中山より鳴子へ

木地師が、製品を求める消費者に近づく
消費者の意向に敏感に応じるようになる

蔵王東麓の場合



鳴子の場合

文化10年 (1813) の木地屋

寒湯番所

善吉以下6軒

鬼首木地山

鬼首荒湯

六兵衛以下4軒

鳴子

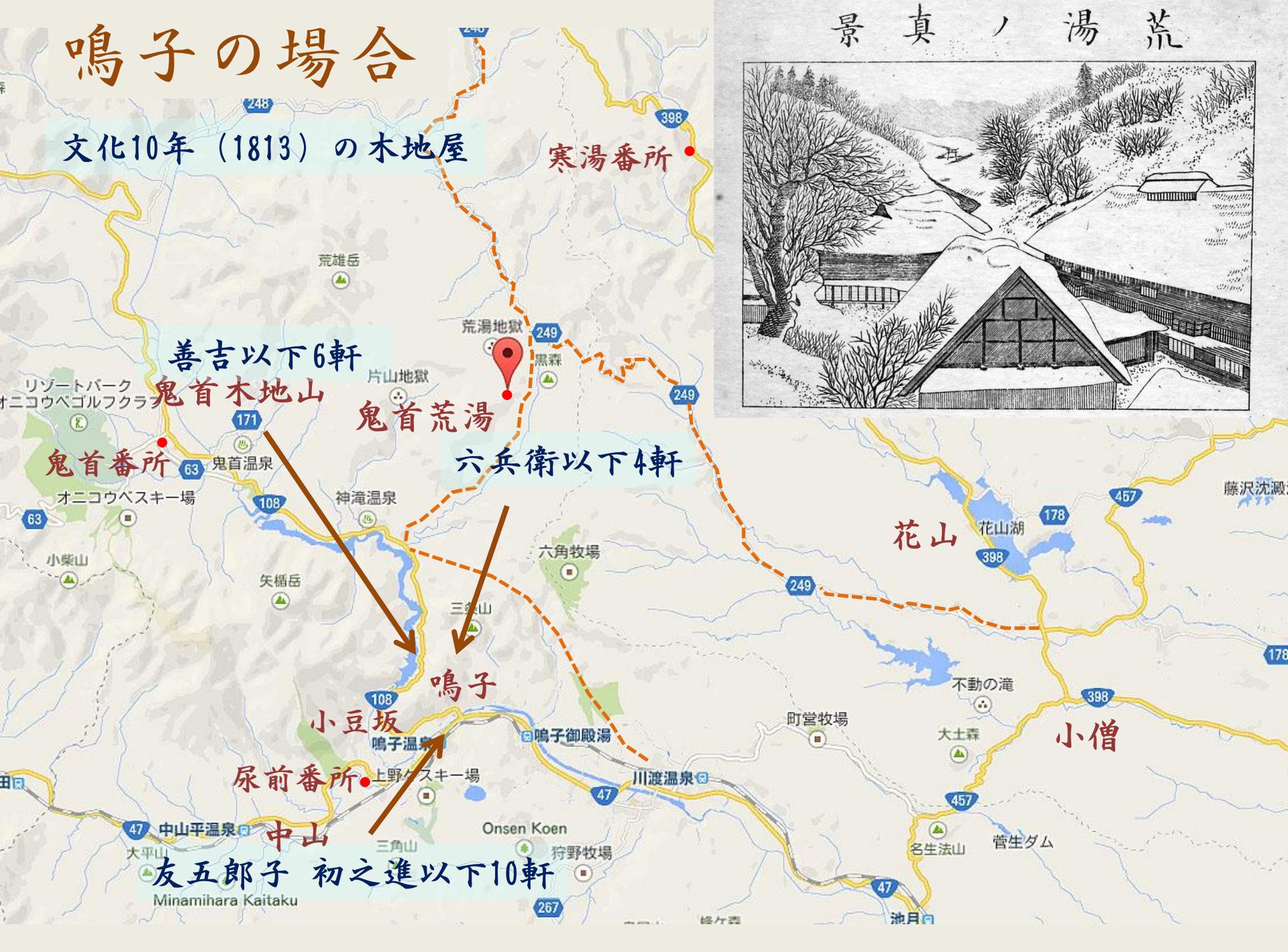
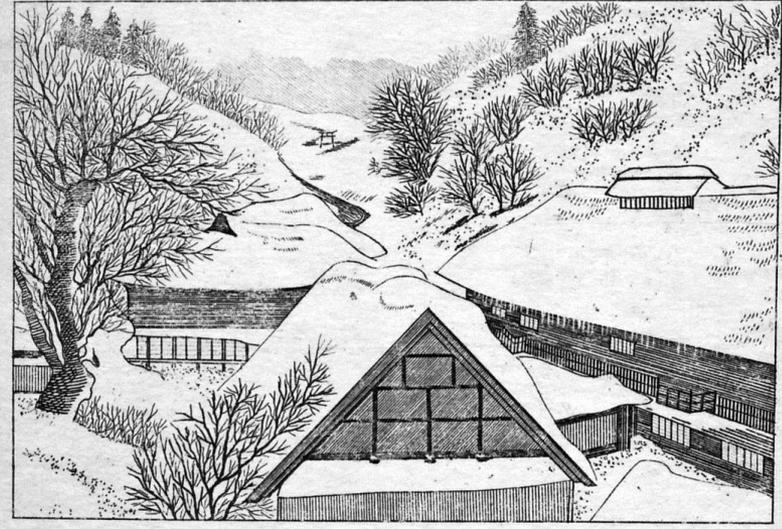
小豆坂

尿前番所

中山

友五郎子 初之進以下10軒

景真ノ湯荒



ほうこからこけしへ 進化の背景

- ③ 赤物木地技術の流入 (小田原・箱根より)
(伊勢・金毘羅参り、工人の流動)

土湯

源五郎・亀五郎の金毘羅まいり
文政年間

遠刈田

新地 金比羅碑2基
文政6年8月 文政8年10月

鳴子

温泉神社神官 早坂某 伊勢参り
源蔵湯逗留の小田原の木地師
弘化年間

作並

箱根より来た南条徳右衛門
文政年間



土湯 文政6年3月
金毘羅碑 施主源五郎

③ 赤物木地技術の流入 (伊勢・金毘羅参り、工人の流動)



文政8年10月
遠刈田新地の金毘羅碑

文政6年3月

夫木地挽者
維高親王始而
於函根 御癸
業為被有而
後我師南德
翁有相傳
而予亦令汝

相傳此天下之
秘業也努力
他見他言有間
敷者也
付此業ヲ知者予
兄弟羽前三人
汝ト共四人
右之通今相傳

作並 岩松直助文書 (万延元年)

箱根
湯本
挽物店



箱根名品挽物細工

街道湯本村にあり。花美なる諸品を細工して、色々彩り塗りて店前に飾る。また雛の芥子人形の細工をしおらしくして、わずか方寸の箱に百品二百品も入れるなり。湯本伊豆屋の店諸品多し。

関門七律
 関門百里倚龍巖、十二東秦車轍通。
 天、色幾餘黃霧、外人一家半住白雲中。
 湖、分銀漢星、衣湛峯並芙蓉、水雪同雄。
 一自終軍棄繻、入于今士氣此間雄。

梅の花
 燕村
 九裡
 貞一

箱根名品挽物細工 街道湯本村にあり。花美なる諸品を細工して、色々彩り塗りて店前に飾る。また雛の芥子人形の細工をしおらしくして、わずか方寸の箱に百品二百品も入れるなり。湯本伊豆屋の店諸品多し。

「御芥子人形包紙・人形」ライデン国立民族学博物館蔵

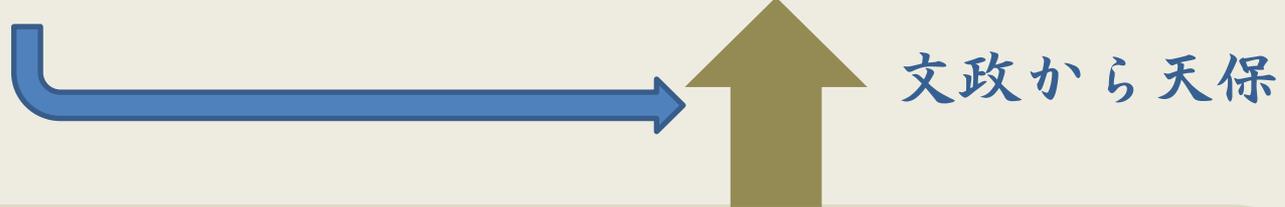


シーボルト

一八二六年四月にはオランダ商館長（カピタン）の江戸参府に随行、道中を利用して日本の文物を研究することに没頭する。収集品はライデン国立民族学博物館に収蔵。

- ① 湯治習俗の発展・定着
- ② 山の木地師が湯治場に定着
(原料立地から消費地立地)
- ③ 赤物木地技術の流入
(伊勢参り、工人の流動)

こけし
きでこ・きぼこ・こけし



前こけしの的ほうこ 東北
(前駆体 Precursor)

木偶 ほうこ 芥子人形

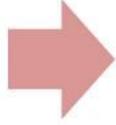
ほうこの世界 日本全国

前こけしのほうこ

堤土人形 赤けし 高橋五郎蔵



赤けし



こけし



仙台娘 おほこ

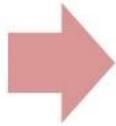
おほこ



きぼこ



でく



きでこ

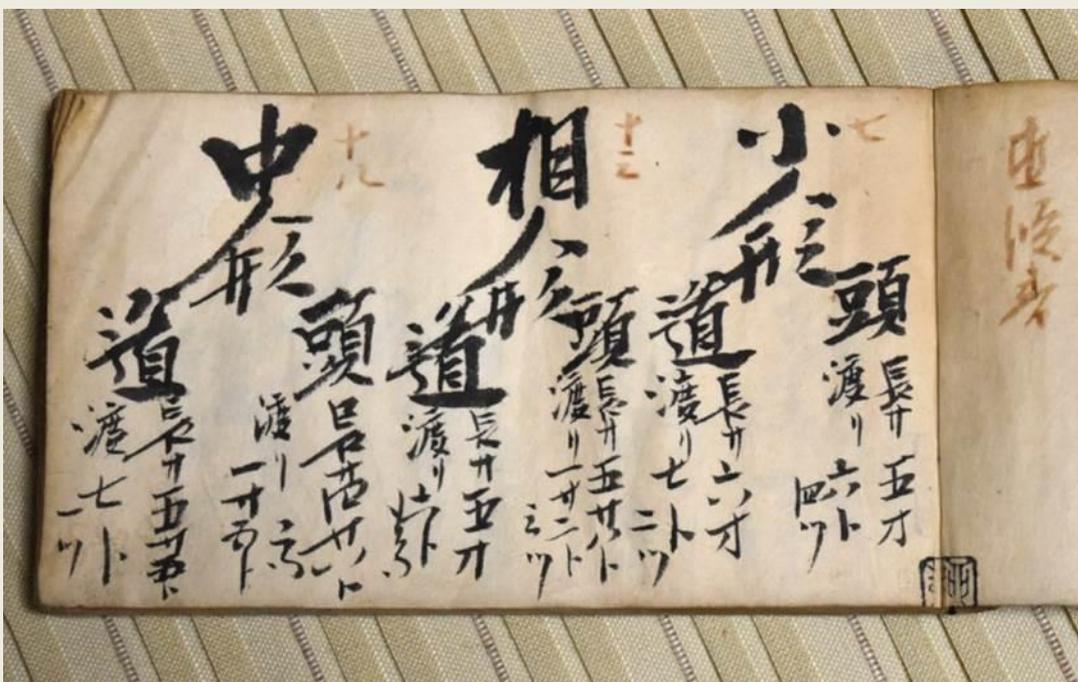
こけしを買う側の認識と呼称

岩松直助文書（萬挽物扣帳）

作並 万延元年正月（一八六〇年）

仕上がり寸法

- 小人形 三寸六分
- 相人形 六寸二分
- 中人形 七寸
- 大人形 八寸四分
- 大々人形 尺



鳴子の二人挽き時代の小物（鈴木庸吉による）

- ・人形、なりごま、おっかけごま、ひねりごま、やみよ

鳴子のこけしの各寸法の呼称

- ・大坊主（七、八寸）、中坊主（六寸）、小坊主（五寸）（直蔵時代 武蔵談）
- ・大坊主（尺、八寸）、中坊主（六寸五分、五寸五分）、小坊主（五寸以下）（庸吉談）

遠刈田新地の寸法表（佐藤友晴による）

| 名称 | 木口 | 全長 |
|------|------|----------|
| こげす | 一寸一分 | 四寸（作り付け） |
| 小人形 | 一寸六分 | 五寸 |
| 中人形 | 一寸八分 | 六寸 |
| 大人形 | 二寸一分 | 七寸 |
| 大々人形 | 二寸五分 | 八寸五分 |
| 極大人形 | 二寸八分 | 一尺一寸 |

文久二年

内郡村法曹待合藤清也三様

長蔵

又此堂中、
山根村法曹待合藤清也三様
御国産二候共、無益之品二相ミへ
申候間、右売買一切被相留候様、被成下度、奉存候。

一 子供手翫人形等他所仕入被相留候儀、別而被仰渡、承知仕候。右之外御城下并在々町場二而赤物師と号し候商人共、雛等色々張抜もの并山根付村々出産之木地人形こふけし杯と申様之品、御国産二候共、無益之品二相ミへ申候間、右売買一切被相留候様、被成下度、奉存候。

こふけし

一 此等御事、後、此等御事、大造向う、四郎武、御事、御事

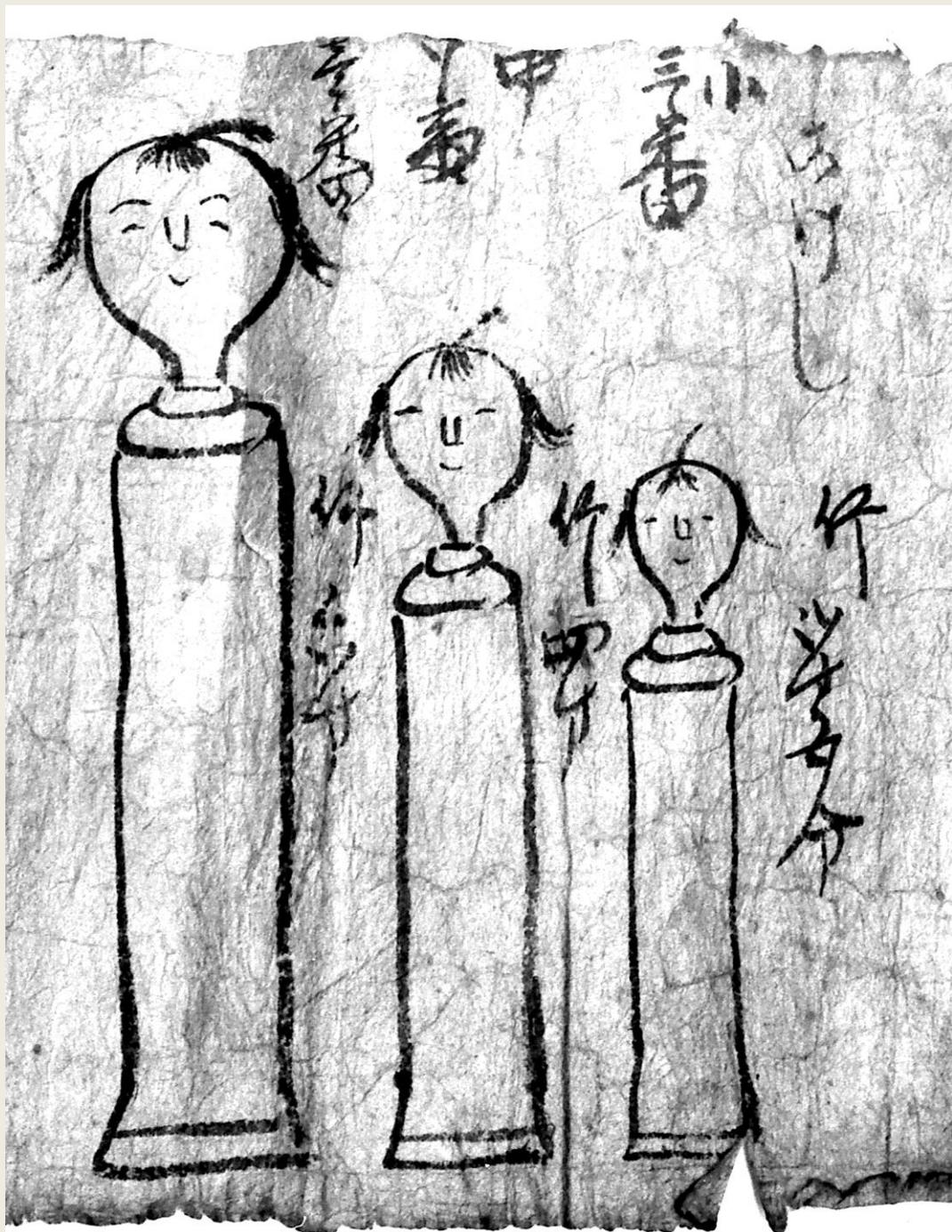
鬼首の長蔵文書

文久2年（1862年） 購入側は「こふけし」と読んでいた。

子供手翫人形等他所仕入被相留候儀、別而被仰渡、承知仕候。右之外御城下并在々町場二而赤物師と号し候商人共、雛等色々張抜もの并山根付村々出産之木地人形こふけし杯と申様之品、御国産二候共、無益之品二相ミへ申候間、右売買一切被相留候様、被成下度、奉存候。

別而（べっして）＝とりわけ 杯（など）＝等と同じ

こけしを作る側が「こけし」の
呼称を使った始めの頃の例

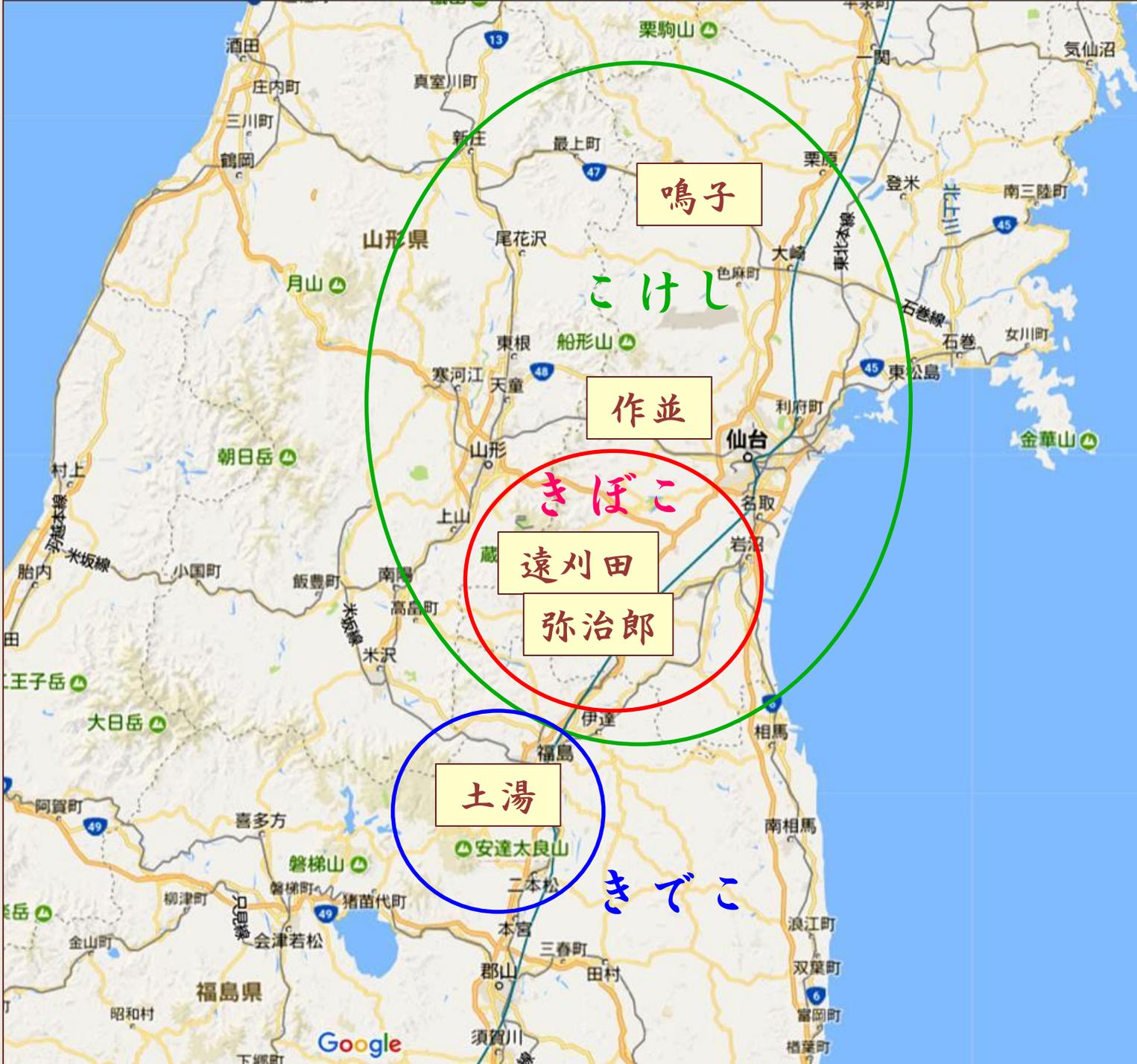


長作文書
明治十九年

長沢

十一系統分化以前の

こけしを買う側の
木人形の呼称



鳴子

こけし

作並

きぼこ

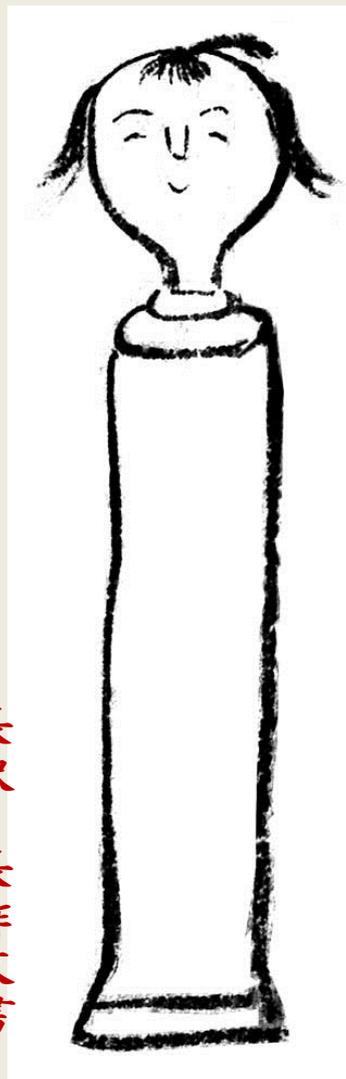
遠刈田

弥治郎

土湯

きでこ

作並・鳴子の共通の祖形



長沢
長作文書

横山
佐藤善七



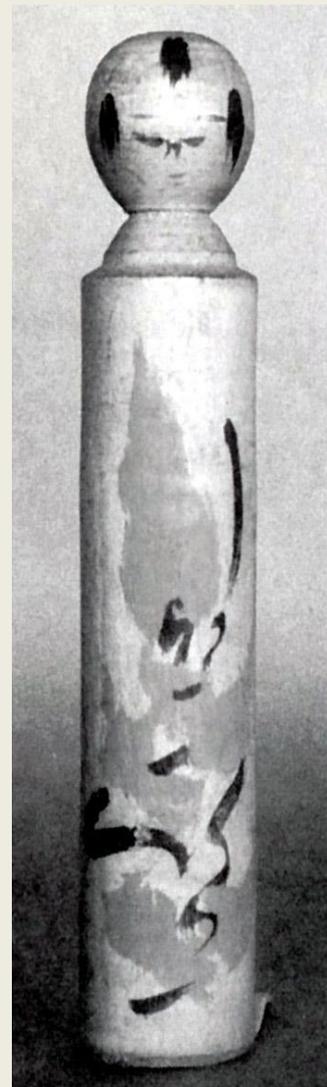
鳴子
作者不詳



芋沢
今野新四郎



仙台
高橋胞吉



11系統分化以前の姿

蔵王東（遠刈田・弥治郎）の共通の祖形



遠刈田 伝佐藤周右衛門
天保三年生まれ



弥治郎 佐藤伝内
祖母とよ トヨノオボコ
天保七年生まれ
宮村佐藤與蔵長女

足踏み口ク口が導入されるまでは
弥治郎では口ク口模様が描かれることはなく
遠刈田とほぼ同様の様式のこけしだった

系統の分化

足踏みろくろ（一人挽き技術）の伝承

青根・遠刈田へ参集した人々（明治20年代初）

- 弥治郎
- 佐藤幸太・佐藤栄治
- 毛利栄治（飯坂へ）
- 蔵王高湯から
- 岡崎栄治郎・（我妻勝之助）
- 土湯から蔵王・山形へ
- 阿部常松
- 肘折
- 柿崎藤五郎
- 作並
- 槻田与左衛門
- 秋保
- 太田庄吉
- 南部
- 照井音治
- 鳴子
- 大沼岩蔵

各産地毎の創意工夫が起こり、多様化する

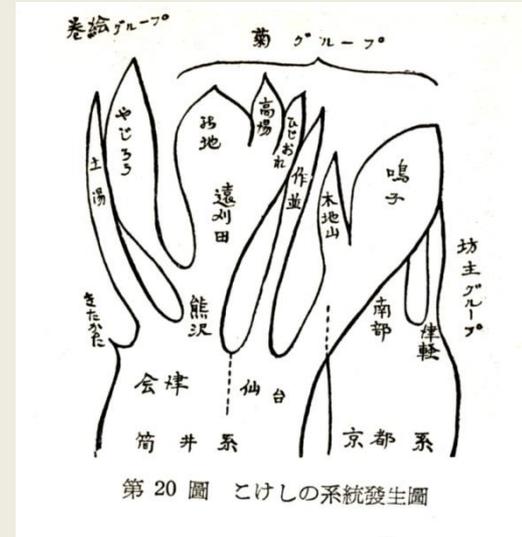
系統分類学上のこけしの系統

系統分類学は発生から時間に沿って分岐を辿る考え方で、系統樹が描ける。

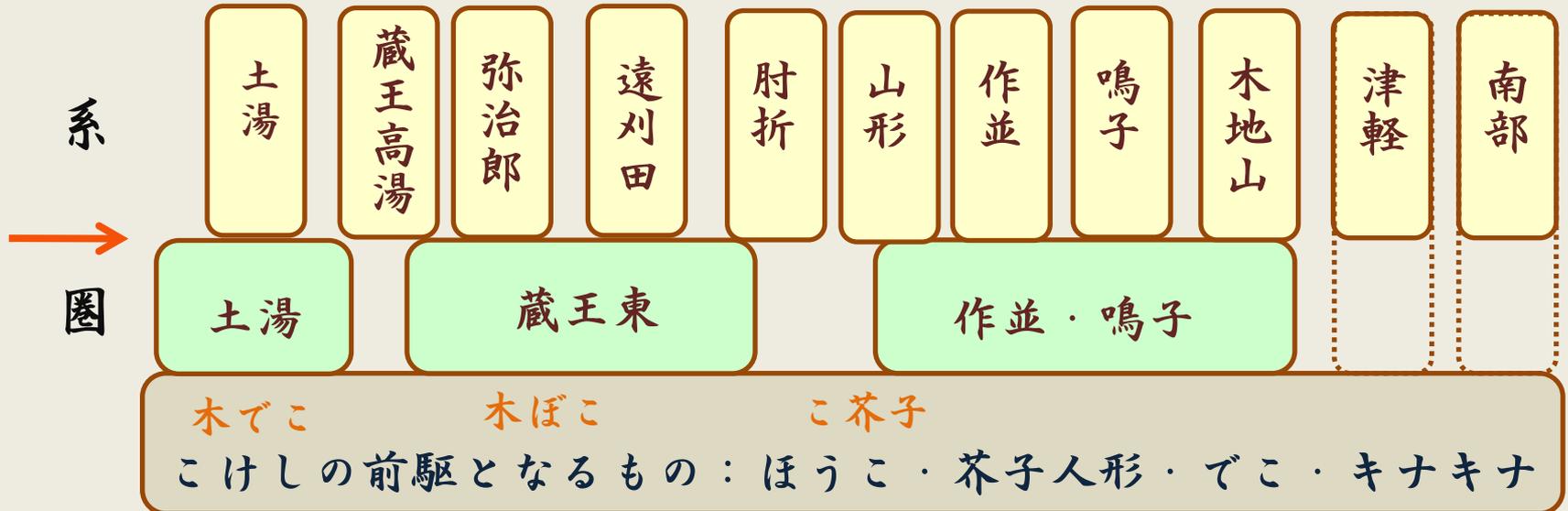
こけしの系統分化

二人挽きから一人挽きへの技術革新が契機になって明治17年~23年ころにこけし様式の爆発（系が全部出揃う）が起こったという状況を想定している。

一人挽き技術による系の分化



鹿間時夫による
古典的系統樹



これらを「ほうこ」と呼ぶべきか、「こけし」と呼ぶべきか？



明太郎

木おぼこ

幸兵衛

長おぼこ

伊太郎

きなきな

雛祭りの庶民化

雛飾りは、江戸時代に大きく発展した。

特に、都市部が経済力をもつ江戸後期になると、裂製の
優美な衣裳雛に諸道具や添え人形も加わり、豪華な段飾り
や御殿飾りが出現した。

さらに江戸末期から明治時代にかけて、土、紙など身近に
ある安価な材料を使って庶民のための雛人形が全国各地で
作られ始めた。



『江戸名所図会』十軒店雛市

雛飾りとしてののこけし

鳴子ののこけし

古式の髪型である角髪（みずら）様式の鬘



高橋五郎蔵

大沼又五郎



日本こけし館

高橋勘治



西田記念館

大阪の蒐集家岸本五兵衛（彩星）のもとには
高野幸八作と思われる尺二寸五分の男女一対
のこけしがあったへこけしの追求

雛飾りとしてのこけし

蔵王高湯 岡崎栄治郎

尺九分（33センチ）

東京こけし友の会



仙台屋



尺（30センチ）

蔵王高湯ではこけしを雛壇に飾る風習が生まれた。飾られるこけしは倒れにくいように太くなった。

- ① 湯治習俗の発展・定着
- ② 山の木地師が湯治場に定着
(原料立地から消費地立地)
- ③ 赤物木地技術の流入
(伊勢参り、工人の流動)

こけし

きでこ・きぼこ・こけし

東北固有説

深沢要
土橋慶三

文政から天保

前こけしの的ほうこ 東北
(前駆体 Precursor)

木偶 ほうこ 芥子人形

ほうこの世界 日本全国

東北残存説

久松保夫

各人のこけしという概念の範囲によって、また
関心の範囲によって残存説も固有説もあり得る

これらを「ほうこ」と呼ぶべきか、「こけし」と呼ぶべきか？



明太郎

木おぼこ

幸兵衛

長おぼこ

伊太郎

きなきな

1. 「伝統的工芸品」とは（定義）

■「伝統的工芸品産業の振興に関する法律（伝産法）※」に基づき、経済産業大臣が指定した工芸品。

（※）伝統的工芸品産業の振興を目的として、昭和49年に公布された法律。

■指定の要件（伝産法第2条）

- 一 主として日常生活の用に供されるものであること。
- 二 その製造過程の主要部分が手工業的であること。
- 三 伝統的な技術又は技法(注)により製造されるものであること。
- 四 伝統的に使用されてきた原材料(注)が主たる原材料として用いられ、製造されるものであること。
- 五 一定の地域において少なくない数の者がその製造を行い、又はその製造に従事しているものであること。日本人の生活に密着し、日常生活で使用されるもの。

（注）具体的には、100年以上の歴史を有していること。

■現在の指定品目→**全国で218品目**（平成26年9月現在） ※詳細はP12, 13を参照



桐生織



箱根寄木細工



東京手描友禅



駿河竹千筋細工



丹波立杭焼